

槐

かい

岡井省二創刊

平成15年8月号

平成十五年八月一日発行 第十三巻第八号 通巻第一四六号（毎月一回 日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



天道に水を打つ

高橋将夫

打水の初めきれいな円となり

まひまひの回り辻褄あつてをる

五月闇きれいに掃いてありにけり

高野山金剛峰寺のかたつむり

蚊帳吊らず簾は巻かず心太

光陰や岩をかすめる雨燕

招き猫黄雀風を招きたる

夏桃の皮ためらはず剥けにけり

あぢさゐの花に風くる呪文かな

猩々が天道に水打つてをる

—斑女より—

金澤明子

黒日傘さしかけてをるガラシヤかな
むせつつも何ひき寄する蚊遣香
老鶯やくもりガラスの部屋にゐる
睡たさの手首なりけり浚団扇
軽鴨の子の瀏をはなれず下りをり
金箔の音の帷子・能袴
お調べや簾あげたる鏡の間
洗ひ髪妹背を契る遊女かな
まみえけん加茂の流れの大夕焼
秋扇面テの口を隠しけり

特別作品

望の夜の恋の扇を重ねをる
山と谷あるや斑女の捨扇
扇絵の秋野の草の垂るばかり
小鼓のかたへに扇おきにける
重陽や翔つ鳥爪をたたみをる
白桃のうぶ毛をいらふ指の腹
薄紅葉水面に母のゆれにけり
日輪とわたつみ入るる秋の闇
結界や放牛地藏つくつくし
槐の実にあをぞらありし肋かな

槐安集

市場基巳

雲ゆきの明日も雨か雉子啼く
芽茨のこころあたりや犬埋めし
蟻道を追ひて鬢には白きもの
雉子啼くやまたひとしきり降り暗む
雉子啼きしあとも霧湧く町はずれ

水野恒彦

かつぎゆく青竹長き立夏かな
蛇衣を脱ぎしところに靈芝あり
わが声のわが身を潜る五月闇
赤松の幹くらくらと半夏かな
羽抜鷄暮天のひかり背負ひたる

石脇みはる

ゆるゆると立石寺まで墓
はんざきは眠りぬ吾は牛乳を飲む
夏潮の賢島にて日暮れけり
夜振火のこゑなきときの流れけり
川べりのいづれ玉巻く芭蕉かな

竹内悦子

夜遊びを叱られてをる春蚊かな
婆一人皮のソファ―に昼寝かな
ずぶぬれの芍薬あまたあまたかな
フラメンコはちすの浮葉巻葉かな
帚木のくらやみ薬師如来かな



木下野生

日のあたりゐて昼まへの螢舟
螢見に行くとして髪を梳いてをり
郭公や極樂の絵を見てをれば
ほととぎす一行をいま書きしのみ
夏の夜のテレビ終ひは人殺し

中島陽華

潮煙鉄砲百合を束にして
緑蔭の中の仁王の貌美しき
花の雲縄で結はえし豆腐かな
地を叩く槌音高し汗の玉
アオザイの夏の港のまだ覚めず

延広禎一

海をとこの担いで来たる鯉幟
くれなゐの木偶の蹴出や夏はじめ
骨壺とたけのこ飯のてんこ盛
緑青の泛きたつ樋や柿の花
オスローに銀の匙買ふ薄暑かな

栗栖恵通子

水無月の羊を連れてかえりけり
指ながき男の前のさくらんぼ
羽抜鶏六角堂のきしみをる
帚木やおノコ口島の吹き寄れり
六識に六月の首のせてをる

槐市集

天野きく江

海中に勾玉を見し子鮎かな
蚊帳に入れ蛸と真魚板干しにけり
花棟みんな握手で別れけり
日の風の目眩くなり栗の花
田の神のもの申したる五月闇

雨村敏子

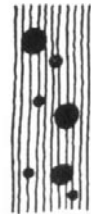
海寄りにまつり屋台や豆の花
千客万來できたてのかしわ餅
多羅葉の涼しき葉ずれ二の鳥居
清明の雨音を聞く目覚めかな
空海の背ラ八十八夜かな

秋岡朝子

両の手に蛸を包む命かな
腕時計ポイとはずして昼寝かな
揺れながら水に映れる藤の花
目を開けて金魚の泳ぐ子供の日
落味噌にひそかな欲を混ぜてみる

岩月優美子

山藤に胸郭広くなりけり
はんざきの水より出でし腓かな
胞衣塚の周り卯の花匂ひけり
夏衣きらきら潮の風の来る
杉山の影不揃ひに植田かな



槐集

高橋将夫選

青葉木菟のこゑのはつきり朝の夢 枚方 雨村 敏子

結願の慈尊寺にあり葱の花

空海の山へゆつくり花の風

連翹の沖や潮の目動き出す

六時屋の餡の乾くや夏兆す

ももいろの暈を虚空にさくらかな

薰風の鼻の上かすめ目覺めけり

東へ 天眼 動き 鑑 真 忌

明るさや楠の若葉も根もうせて

はんざきの水に木洩れ日弥勒仏

からももや真夜中も雲動きつつ

春鴉何の穴かとおもひつつ

犀がゐて五月の空を広げたり

六月をリュートの音となりけり

雲にふれ泰山木は花かかぐ

リュートは真の楽器

わが庭にかへる居るらし星の空 香川 黒田 咲子

緑蔭のねむる仔犬をみて足らふ

子亀はや万年の相あらはなり

かはたれの青無花果に目を凝らす

六月や黒髪ならば雨よろこぶ

鯤啼くや青葉の寺に忌を修す 京都 竹中 一花

青嵐伏見人形動かさざる

菩提樹の茂りや風の止みし闇

木葉木菟乾の門の奥深し

真ン中に注連の櫛の青葉かな

麦秋に入口のあり阿闍梨かな 安城 天野きく江

真夜中の竹皮を脱ぐ触りかな

海峡を出入りしたる水母かな

いろいろと詰めたき蛭袋かな

椿象を見てゐてものを言はむとす

銀河往來

高橋 将夫

俳句とレトリック③

「山眠る」「蛇の衣」「仏の座」など、比喩的表現は季語にも多数みられる。「衣のごとき蛇の殻」と言えば直喩。「蛇の衣」は暗喩で、衣は殻のメタファー。

ところで、「山眠る」は比喩表現であるが、擬人法でもある。「赤シャツが笑う」はどうだろうか。夏目漱石の小説なら、「赤シャツ」は暗喩的表現。嫌味な先生が隠れている。ところが、「シャツ」そのものが笑ったというのなら擬人法ということになる。

暗喩は通常メタファーに隠れたものの存在を窺わせる。その隠れたものとメタファーの距離が遠いほど難解となる。この関係は象徴についてもあてはまる。

ここで、暗喩の形式的分類を紹介しておこう。

- ① デアル型——「男は狼である」
- ② 連結型——「仕事の山」
- ③ 形容詞型——「美しい理論」
- ④ 名詞型——「東京砂漠」
- ⑤ 動詞型——「新しい分野を開拓する」
- ⑥ センテンス型——「一枚岩にひびが入った」（瀬戸賢一）

十九世紀後半、古典的レトリックが見捨てられた後も、暗喩だけは哲学者、詩人達の興味をひきつけてきた。

青葉木菟のこゑのはつきり朝の夢 雨村 敏子
青葉木菟の声を聞いた。あのはつきりした声は、はたして夢か現か。省二の声か。

ももいろの暈を虚空にさくらかな 中野 京子
日の暈、月の暈と桜を思い浮かべてみてほしい。まさに全体が虚空…そんなふうに感じられないだろうか。

犀がゐるだけの景。犀の一点ゆえに、空が一層広大になる。そこに犀の存在がある。一即一切、一切即一。 本多 俊子

六月や黒髪ならば雨よるこぶ 黒田 咲子
六月の雨とみどりの黒髪。はたして雨が喜ぶかどうかは感知するところでないが、そう受けとった作者の感性に賛同する。

菩提樹の茂りや風の止みし闇 竹中 一花
菩提樹の茂りの闇。風が止んだ状況をとらえたことにより、闇が一層深いものとなった。

海峡を出入りしたる水母かな 天野きく江
出入りしたのが水母であるところが面白い。潮の流れにまかせ、自然のままに。自然法爾。（以下略）